



資料	No.
第174回環境影響評価審査会 事後調査報告	1

神戸国際港都建設計画  
西神第3地区工業団地造成事業  
(神戸複合産業団地)の変更  
に係る平成28年度事後調査概要書  
の概要について

平成30年2月

神戸市

## 1 対象事業の名称、規模及び内容

### (1) 名称

神戸国際港都建設計画西神第3地区工業団地造成事業  
(神戸複合産業団地)の変更

### (2) 規模

面積 24.8ha

### (3) 内容

#### ア 種類

工業団地の造成

#### イ 位置

神戸市西区見津が丘4丁目及び押部谷町木津字南笹ノ尾、  
字鶴羽谷、北区山田町藍那字西山。

## 2 平成28年度事後調査の実施内容

環境要素	環境調査	施設調査
植物	苗畑における管理・増殖 (一時避難に係る管理・モニタリング) 移植調査(本移植) 移植個体の生育状況調査 (本移植に係る管理・モニタリング)	造成緑地、造成法面の緑化の 実施状況
動物	一時避難個体のモニタリング調査 (一時避難に係る管理・モニタリング) 移植個体の生育状況調査 (本移植に係る管理・モニタリング)	
生態系	植生(コトラード調査) チョウ類(ラインセンサス調査)	
廃棄物		ゴミ収集量

3 平成 28 年度事後調査結果の概要

環境要素	調査内容			評価
	調査項目	調査時期・地点	調査結果	
植物	【環境調査】 苗畑における 管理・増殖状況 (一時避難に係る モニタリング)	【時期】 管理:通年 モニタリング:6、10月  【地点】 一時避難先(苗畑)	保全対象種では、 キキョウ 144 個体の予備 個体の生育を確認した。 その他の保全対象種は 移植が完了し、 苗畑における残余個体は なくなった。	工事の終了した平成 26 年度に 本移植も完了した。 平成 28 年度は一時避難先である苗畑に 生育する親株及び予備個体の除草や 鉢上げ等を実施した。
	【環境調査】 移植調査 (移植地の検討 及び 移植の実施)	【時期】5、11月  【地点】キーナの森	カキノハグサ 1 個体、 キキョウ 50 個体、 テイショウソウ 2 個体、 エビネ 21 個体 をキーナの森に 移植した。	苗畑に残っている予備個体及び 親個体について、 種の保全育成の促進を図るため できるだけ移植することとし、 平成 28 年度に移植を実施し 可能な限り貴重植物の保全に努めた。
	【環境調査】 移植個体の 生育状況 (本移植に係る モニタリング)	【時期】6、10月  【地点】 本避難先 貴重植物等育成地、 キーナの森、 緑地法面、 都市緑地	【貴重植物等育成地】 テイショウソウとエビネは 安定して増加している。 カキノハグサ、 オオヒキヨモギ、 キキョウ、アワボスゲは 開花が確認されたが、 個体数は減少した。	保全対象種 8 種のうち、 過年度に苗畑にて全消失した キンラン、ギンランを除く 6 種については 本移植先で開花や結実等が確認され 概ね良好に生育している。 キキョウは、実生の発生が平成 27 年度より 少なかったため、確認個体数が 減少しているが、過年度と同様に 開花や結実個体が確認された。 オオヒキヨモギは二年生植物であるため 個体数が安定しないが、実生が育っており 繁殖が確認できた。 テイショウソウ、エビネについては、 移植先において種子や栄養繁殖による 増加が認められている。 アワボスゲは貴重植物等育成地及び キーナの森において、 個体数の変動はあるが、 種子や栄養繁殖による増加が 認められることから、 それぞれ定着したと考えられる。
	【施設調査】 造成緑地、造成 法面 の緑化実施状況	【時期】 平成 29 年 6 月  【地点】 緑化の実施区域	法面の植栽が順調に 生長している様子を 確認できた。	過年度の緑化実施区域では、 法面に施した植栽が順調に生長して 造成法面を被覆し、 緑地として機能しつつあるといえる。
	【環境調査】 一時避難に係る 管理・モニタリング	【時期】 6、3月  【地点】 キーナの森内の 既存ため池	カスミサンショウウオ :6月調査では確認 されなかった。 :3月調査では 成体 5 個体、 卵のう 7 対が 確認された。 ミナメダカ :生息は確認され なかった。	カスミサンショウウオについては、 平成 13 年度以降、平成 21 年度を除く 全ての年度で生息が確認され、繁殖の 確認数も多いことから、 本ため池を繁殖地としている個体群は、 継続的に維持されていると考えられる。 ミナメダカは、一時避難直後の 平成 14 年度から確認されていない。 避難個体数が 2 個体と 非常に少なかったことから、 繁殖できずに消失したと考えられる。
動物				

環境要素	調査内容			評価
	調査項目	調査時期・地点	調査結果	
生態系	【環境調査】 植生 (コドラート調査)	【時期】 8月  【地点】 保全緑地の 林縁部 1箇所	林縁からの距離が5mまでの調査区では、ノイバラクラス(林縁群落の要素)の種数及び被度が最も大きく、クサギアカメガシワ群団の種も出現した。ノイバラクラスの種数及び被度は、林縁からの距離が大きくなるにつれて減少したが、林縁からの距離が15~20mの調査区では、高木層の枯死木の存在により林内が明るかったため、種数及び被度が大きくなった。	最も林縁側の調査区における林縁群落等の被度は約4%で予測時の約5%とほぼ同じであった。一方、落葉広葉低木林(クサギアカメガシワ群団)や路傍の植物群落(ヨモギクラス)の出現種数が環境影響評価時と比べて少なかった。これは、改変区域の周囲に造成した法面を緑化したことにより、キーナの森に対する林縁効果の影響が弱まったことがひとつの要因と考えられ、緑化による保全措置の効果考えられる。
	【環境調査】 チョウ類 (ラインセンサス調査)	【時期】 6月、9月  【地点】 事業区域及び その近傍の 3ルート	全体では5科24種のチョウ類が出現し、確認個体数はSt.1及びSt.2で50前後と多く、St.3はその約半数であった。調査結果をもとに算出した多様度指数及び自然度指数は、保全緑地(St.1)では、環境影響評価時の予測結果(St.4)と比べて多様度指数は大きかったものの、その他の指数は予測結果を下回った。造成緑地(St.2)では、予測結果(St.5)と比べて蝶指数平均値Aは近い値であったが、多様度指数や均衡度指数は大幅に下回った。事業区域及びその近傍(St.3)では、多様度指数及び蝶指数平均値、蝶指数加重平均値が予測結果(St.6)とほぼ同じ値となり、均衡度指数は予測結果を上回った。	キーナの森(St.1)では、多様度指数および自然度指数が予測結果を下回った。主な要因としては、改変区域に接する林縁部にクズが繁茂し、林縁部に生育する植物の種数や開花植物が貧弱になっていることが考えられる。造成緑地(St.2)では、多様度指数H'や均衡度指数J'が予測結果(St.4)を下回った。これは、ツバメシジミおよびキタキチョウの個体数が突出して多かったことが主な要因と考えられる。また、蝶指数加重平均値WAが予測結果を下回ったのは、予測時の調査で出現していたジャノメチョウ、ヒメウラナミジャノメ、クロヒカゲなどが出現しなかったためと考えられる。
廃棄物	【環境調査】 施設供用に伴う 産業廃棄物の発生量	【時期】 平成28年度  【地点】 事業区域内	【産業廃棄物発生量】 年間廃棄物発生量 45t/年・ha(308t/年) 予測値 100t/年・ha(2,400t/年)	産業廃棄物の排出抑制に努め、平成28年度の産業廃棄物発生量は、評価書の予測を大幅に下回った。